

1000
91
1

八丈鴻筆記全

伴方自記



八丈島青ヶ嶋及伊豆七嶋之圖

八丈嶋四里十四五丁ニ二里四五丁
西山ト云高山アリ麓ヨリ頂ニテ
一里半形粗富士山ニ似タリ嶋人
八丈富士ト稱ス安永年中頂キ
大ニ燃出テ峯頂ニ其後ハ上リ
テ別峯ナシ燃枝ニ跡大ニ云ト
九

西



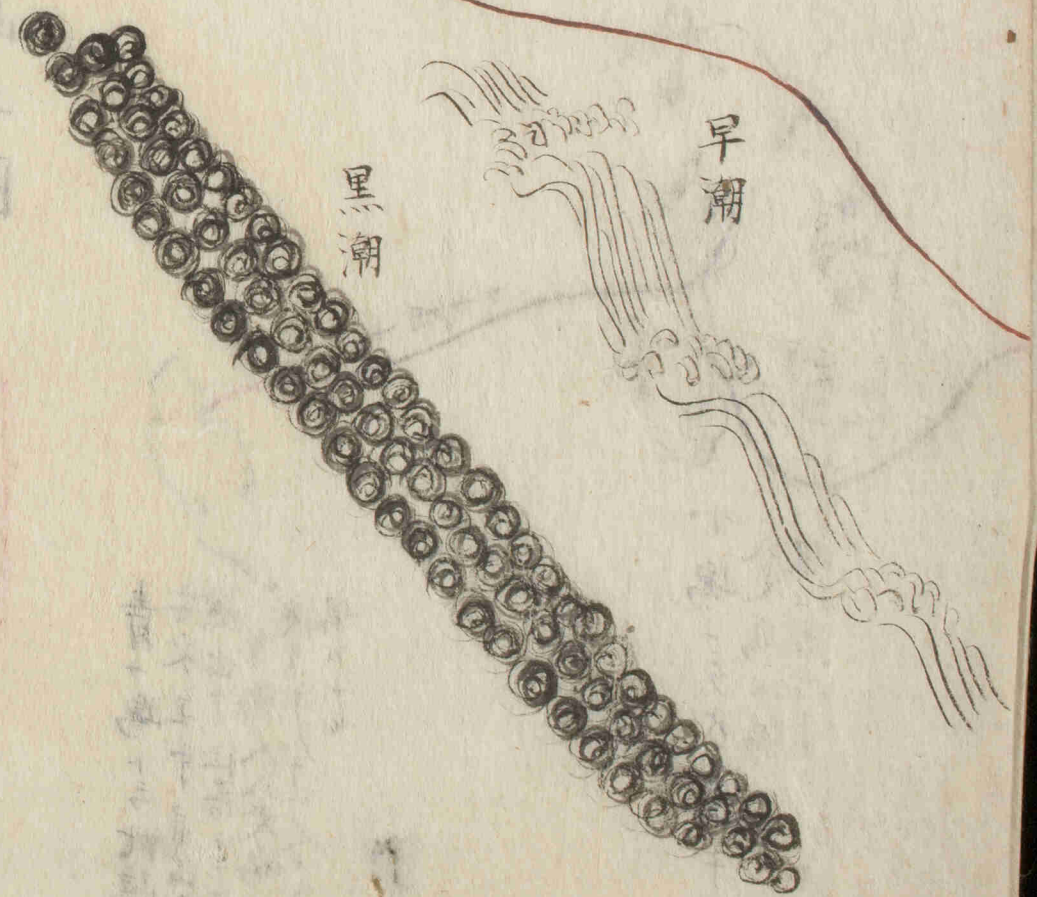
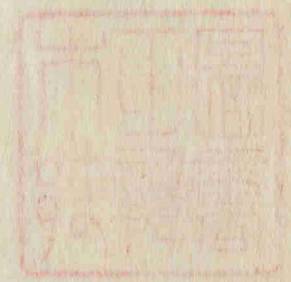
小嶋ト云方一里半
八丈嶋ヲ隔ル
僅ニ五六丁

青ヶ嶋ト云此嶋
安永年中ヨリ山
然出テ住居ナリカ
タキ嶋人八丈嶋
後リテ今ハ人ナキ
嶋ト云



早潮ト云ハ幾段トモナリ
高下アリテ潮行飛泉ノ
ミク黒潮ト云ハ海面黒土
ヲ流スガゴトク黒クナリテ
湯ハカリトナル
右ノ潮行南ヘトル時アリ
東ヘトル時モナリテニ近ナ
ラズト云

八丈島
八丈島
八丈島



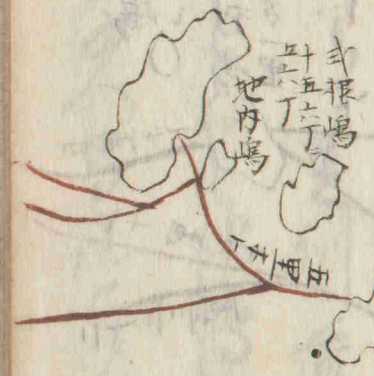
神蔵嶋
三十五丁サ五丁

三宅嶋
三里半二里

本詳記ノ中ハナリ

神津嶋
一里半

新嶋
三里三
三十三丁
ニチ村アリ



三本竹ト云ハ数百丈ノ岩竹ヲタテテ
テ三本竹ト云ハ凡数ナリ岩アリハ
丈嶋ヨリモ見元ト云

〇〇 イナニ嶋

〇 シレバ嶋
〇 セニ嶋

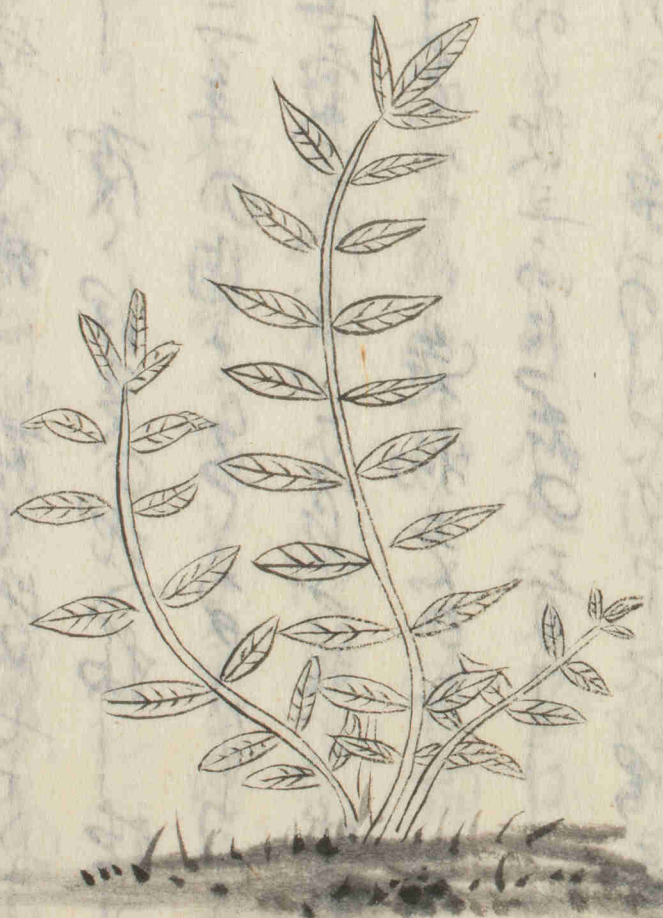
名物にあらざる人数の中にも人の妻となりては
 名物にあらざる人数の中にも人の妻となりては
 名物にあらざる人数の中にも人の妻となりては
 名物にあらざる人数の中にも人の妻となりては
 名物にあらざる人数の中にも人の妻となりては
 名物にあらざる人数の中にも人の妻となりては
 名物にあらざる人数の中にも人の妻となりては
 名物にあらざる人数の中にも人の妻となりては
 名物にあらざる人数の中にも人の妻となりては
 名物にあらざる人数の中にも人の妻となりては

ねのめ

ねのめ

ねのめ

ねのめ



鳴人妙草はねりて平世の良薬とん中女との人
 米とん中女との人に良薬とん中女との人

授けしと傳ふる一と一の父傳ふ入す所を
また兼頼の鹿のあぐ曲むたれ別船きてい
入すの所は是の一般のてい運を仲のて入船の事
見れ別と傳ふる人海より傳ふ別船きて兼
とて別とて三の板の物候も後人の中に武
勇の志より押取一日の押取一日の志より
意せんといふいんともうさき傳ふるを
八丈傳ふる傳ふ別船三船一人の持右一日より池
より八丈の板よりぬれも日本より古一とて
次第三船より傳ふる地方より別船よりあてい
小童と伝ふるアトウニウさるる別船よりあてい

嫡男と名二男とてヤウ三男とサホウ四男とてヨウ
お男とて六男とロウ七男とてツテヤウ八男とハツ
ヤウ九男とクウロウ嫡女と名二女とナリ一女とテウ
と名二女と名二女と名二女と名二女と名二女と名
九女と名二女と名二女と名二女と名二女と名二女
武親の右又いぬの右を名二女と名二女と名二女
事一人の事と名二女と名二女と名二女と名二女
はれ我より以下ハヨウヲト長クして女子琉球へ
そくハヨウと名二女と名二女と名二女と名二女
傳ふるわらうと名二女と名二女と名二女と名二女
昔に地へハイアイウと名二女と名二女と名二女

物とて泣つとこころもねたなりといふといふ
ゆへに人知れずと出れぬと親とあつめ
婦人など通はれぬとて父兄や人など
あつめはなき動もとらふわれと物とて
とき、祐にまゐる事なりと物とて麻とイトたう
九に獨りイトたうのうさうとあつめ
せぬといふ言とせうといふこころ。こころとてイト
こころといひ親めかてけあつめを南と天道
くこころねれと流人と夜とあつめとて
ゆあつめといふきいゆれと物の序をうとて
に解せん流人とてこころのゆへとて八丈言をうとて

とけりてうきとてふきとて

八丈ひひはるのみ

地

あつて

ゆき事あつめ

ゆきとて

この

あ

あつて

ゆき事あつめ

ゆきとて

この

あ

あつて

ゆき事あつめ

ゆきとて

この

あ

あつて

ゆき事あつめ

ゆきとて

この

あ

あつて

ゆき事あつめ

ゆきとて

この

あ

あつて

ゆき事あつめ

ゆきとて

この

あ

あつて

ゆき事あつめ

ゆきとて

この

八丈結ふに数多織て江戸に売れぬとて

十丈一のなれに 八儀よりと外をと数多織て

減せ給ふされし市一の八反所採りしと云ふの給ふ
市用の外たるなり数多の婦人外は業々も其
も日々給と減り事し世に給ふぬ物御ましく
云ふにやがうサシメありし物も八丈嶋より他
しもの三に比せしものなり

氣れをいふや川に流す時の女共其給ふた
此頃の奥新に奥を流す時い何へ地元の者い
の奥のさきも官事あり時いよとていふ
い給ふと海老の二匹い海亀に地元の者い
がー買なれし時いり人いりり二間もい
大奥とて幾時とまれば給ふ事なりと云ふ

鶴の給ふるものなりと給ふ多しこれら
出所の遠き地元の給ふと云ふは其なり
も奥の大地にこれより給ふたものと云ふ
い何より給ふや給ふ多し秋にこれより給ふ
りていふと給ふ次音と云ふ給ふ馬給ふ多し秋に
丁鴨給ふなりて人と思れりてと云ふなり羊の既
いふものときいものを給ふ給ふ事してまゝ
突て取りしものなり給ふた給ふた創ては給ふ
み所がもの時い地元のい給ふて何へ給ふ
多し三に比せしものなり

物人の給ふに給ふ部と部と云ふなり

獸類、角の外、牛馬を物とて絶てず、又、角に
いたる、安物、今、せん、一、ひ、是、ね、ど、地、こ、り、事、と
猫と、其、ひ、物、て、今、室、宿、の、ね、も、幸、也、や、七、十、文、の、好
こ、そ、て、い、ろ、く、ぬ、ち、を、能、た、の、次、能、と、教、る、也、所、
う、く、三、河、年、の、思、ふ、とき、い、ふ、
家、福、寺、長、小、寺、と、う、二、寺、淨、古、家、少、き、書、部、
出、部、と、所、と、い、ふ、所、で、書、部、せ、た、後、伯
子、さ、り、人、を、授、け、し、て、と、そ、出、部、せ、れ、け、し、書、部、の
ぬ、ま、は、い、れ、先、祖、の、血、脈、も、あ、ら、い、め、つ、ら、の、中、に、ま、
ま、帝、の、情、を、知、り、に、い、ふ、は、信、を、責、て、口、を、糊、と、り、
の、こ、み、れ、世、の、中、に、ま、る、後、時、安、ら、い、ぬ、志、き、い、の、ハ

年、と、す、所、居、る、所、の、風、俗、と、い、ふ、是、も、其、の、言、に、を、き、
當、り、又、に、と、古、の、風、の、残、り、も、や、今、浪、り、通、の、不、ま、れ、
俗、を、教、え、い、じ、と、い、ふ、信、に、う、り、す、世、と、い、ふ、も、念、佛、一、通、を、
事、足、れ、と、い、ふ、た、え、も、他、に、ま、い、當、の、生、計、も、い、ふ、と、あ、
は、い、と、い、ふ、も、帝、と、い、ふ、所、に、ま、る、求、く、智、に、及、む、ん、地、の、
と、け、人、達、を、り、鬼、と、い、ひ、や、あ、り、と、い、ふ、辭、也、と、い、ふ、
知、る、所、事、多、く、い、ふ、所、に、ま、い、ち、地、を、と、い、ふ、と、い、ふ、
二、年、の、秋、中、幸、を、り、南、省、の、高、新、八、丈、の、沖、に、漂、い、
鳴、人、和、を、出、て、藩、に、い、る、に、樺、帆、板、を、物、を、
い、ふ、こ、と、い、ふ、も、損、一、矢、い、せん、と、い、ふ、と、い、ふ、
由、せ、て、潮、に、流、し、是、悟、也、と、い、ふ、と、い、ふ、

長手ちにし者せし宛河内物念ひなるれたい
と御ふひ暇をときてこの樓門を建立ん中をた
のめりあつて中華の製する門と建る見ふ受は實
國物なりと事目と御るん計なり華人の後
公儀より長傳ツキ（むく）給ひしと子

爲(三三)十年の間は必ず次異國の船流れ寄る事
 ありぬと先水とて言はせられし所人も歌
 ろとあらねしぬも人の世いろくの世れとて
 肉まらむとて海を渡る民の重なる所
 多く歎く所傳ふ所痛る所細心の世あり事
 ずる所三つの中に婦人の世とて小兒を抱き

祝者も何と云ふと云ふに丈七寸斗あり
 らうと云ふ桃の花と云ふ上品と云ふ彫刻して
 金なる金と云ふ金に銀米一石と價をやり
 返り金と云ふ目利せし人あり那菰家の念一佛
 ぞいふと云ふものなりと云ふ是と云ふ御し那菰
 家國の恥と云ふや知れ八丈のあり南と云ふ
 の恥と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
 此等の後より中と云ふ此等の秋香
 のことと云ふ其の事も是れ判りしは云ふ次
 日、掃きと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
 此れ日和と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

夕之そりなり海より就の天とそり事
 し夜とみなりと
 鶴よりそり子良本のより形たのあり



高サ一丈よりきふふなり本理なり員教なりて

雅なり武人志の鉄^{ツア}の樹なりと云天竺果あり
 の果と見れは木より似ありと数く画なりこれに
 天竺子生るものと甲種なり又しごとく本を
 形たのあり人いふなりと人しごとく



ちや敷丈までの葉に粒地草草と似て大きいさき
意のや八面を平らる庭をたに植て家との樹なり
右の二本じりより伊豆へ越へて植るとくさる生
せん此度三河に於て樹をたに植ゆると猷くさる
末のを樹敷めとして葉奇せと産る地をたに
茶店をたにものこくといふ異に中風の妙茶と云
西心窓中の高きとしてちや一里余をたに産る
白木の樹といふ風景の地より三河に於てのちや
此物の海へ見えぬとの異にありて産るをたに
小嶋八丈と離りて事とたにたに斗風佐へて文の
法西へ師の如の社のりぬ如神と号し一八丈の

産る神とありし神職と事也虎と祐と祐と
公儀より米二石をたに産る如如のち具足ありと
い後世に於てはと見えぬ角よりたに産るのち余
市へのちにたに産るのちたに産るのちとたに
と見えぬ如なりと云如くは云如くも如如神と
人傷へて産るに南海へ八丈高ありと事と告る
ちのちやまを傷くは産る八丈高をたに産る人
たれと伏んたにたに小島のちに産るに事と
産るに産るのちに産るに産るに産るに産るに
ちのちや九州の地へ産るに産るに産るに産るに
ちのちや琉球國をたに産るに産るに産るに産るに

白くえりところ先年沙菅港役所一の主人
彼らんとて此物と出帆の時これく各れ
うひに運つて手びゆをひきとめし
ひきのやとて此物とあんとて物人
八丈より富士山を見たりとての晴天
底のやとて是處とあんとてのこき
も此物ありと知るなり

昔に伊豆七物とれ流最場より今に八丈三宅
新物也三物のこた定られ最の收まり依
を迫り新物三宅也二物の流人百金人三宅
物に伊豆の浦より度く流海を流人言傳も

解一也八丈より流人七宅なり此物に午馬も
ありとも牧場ありと約とて度次口細もあり漢
も多し先年此物の仲一の哥も流れありと
四より洪水式海流とて流れ出人傳あり
なりと菅港にけしと損一物も本もなり
ものへと解して河橋と見れこれく良材とて念
の入り事とて度と製も此物の哥とて度と
年業師ありと女置して物人業師とて祇
英一物に流人流人戯書の画とき年あり
うりとして人逃る女ひきとて人婦人
のとりかへひきと画とき一信世絵と物人

の見るもの目と致るゝまだてりやうな一坪の
丈も隙と画接れり

神奈川と云ふ三宅八丈の間におく三十日亭と書す
の人と云ふの物へ八面器座とて和入もされり
宅内へ隙をとりしは小和とて器座のけしき
のうらう海にほのかにともる隙と致る
のうらう海にほのかにともる隙と致る
とて此處に記して小和から板柵の本とせし
事おびたき毎に江戸に出て價を致る事
金と云ふるお式八九あるもの板柵の價は
いふやあらん中華賣國のふきと致る

数に及ぶにたつたてなす物とて是の
金と云ひ方うは戸と米酒と物と一年中
用也(き)のものと心の修し買物へ接るもの
金と称し公儀へ納めしとゆふをいふ事
いふその境人の住む所もゆふを板柵
おとす隙き日知と見え先三宅向て接し
八丈の便とゆふに戸を繋ぎする事として
世界の中にいろくのちありて一村の勢
人としていふ事もあるにや
の物にちてのつとめもそれと書す
右に八丈物坪と七物とゆふと致る

一河に於て三河に其世に海軍國火船
那海田村別新田見分りてある天
城村へ下向り予ぬあて石され七十余の沙
側よりいづれへのわをぬ八丈院
治の風俗事跡を記しあてて他より
于時寛政九年丁巳の仲夏三河に其の族
籍天城村火倉氏宅に於て七十二歳古河
松軒居士誌

右の記は氏之不孝換也畢

惟時文化子 庵年三月十六日 は直子

